

活動報告

「ふれあい」を超えた「トライアングルドッグセラピー」  
—クライアント・犬・セラピストの関係性がもたらすもの—

金城富季子\*

カウンセリングルーム アニマルセラピー研究所 poppys

Transcending “Contact”: Triangle Dog Therapy: The therapeutic benefit of the Relationship between Client, Dog, and Therapist

KINJO Fukiko\*

Counseling Room and Animal Therapy Institute poppys

【目的】

動物介在活動の効用は広く知られているが、我が国では単発の「ふれあい」に留まるケースが多く、連続したセラピーにおけるクライアント (CI)・動物 (犬)・セラピスト (Th) の三者関係に注目した研究は少ない。児童・青年期の CI にとって動物が持つ治療的効果のひとつに「成長, 変容の助け」があるという (村瀬, 1997)。「ふれあい」を超えた先には何が起こるのか。CI・犬・セラピストの三者の関係性 (三項関係) が、CI の「成長・変容」に及ぼす影響を考えてみたい。

【方法とセラピードッグ】

報告者が運営するカウンセリングルームを訪れた CI のうち、「ふれあい」の段階を超えて継続的にセラピーを行った 6 事例を検討した。セラピードッグのポピーは、報告者の飼い犬であり、元保護犬の中型ミックス犬 (5 歳, 雌)。臆病で恥ずかしがり屋だが、

譲り受けた動物団体でセラピードッグのトレーニングを受けている。

【結果と考察】

- (1) CI/犬/Th/関係性 4 様相 (表①)。
- (2) 関係性が「ふれあい」を超える条件

CI と犬の関係性が「特別な他者」へと発展するためには、「連続性」「既知の関係性」「安定性」が重要であることが示唆された。さらに、両者の距離を縮めるための調整役としてのセラピストの存在が不可欠である。この三者の関係性が継続することで、複層的な信頼関係 (CI と Th/CI と犬/犬と Th/CI と Th と犬) が構築されることがわかった。

- (3) 三項関係安定以降、総じて事例に生じた変化・事象 (様相別) 表②

CI と犬の相互作用により両者の行動に変容が起こったことが推察される。ドッグセラピーにおける「三項関係」は「物」でなく「いきもの」であるため

	様相 A	様相 B	様相 C	様相 D
時期	出逢い	馴染み	愛着形成	変容と補完
関係性	単純な介在	特別な他者 CI/犬/Th の三項関係	離れていても意識にのぼる関係	螺旋状の循環関係 相互補助から慈しみへ
状態	点から線へ	線から面へ	面から立体へ	立体から螺旋へ
	安定	→ 他者の希求	→ 主体性の表出	→ 変容

\* 連絡先 : poppys.lab@gmail.com

表② 総じて事例に生じた変化・事象（様相別）		
	CI	犬
様相 B	他者希求（家庭訪問の承諾等）	警戒が解ける（CIの足元で寝転ぶ等）
様相 C	愛着形成（犬の写真がお守り等） 「+」行動（部分登校等）の出現	自発的な関わり（*①CIを玄関で待つ/ 自らCIの膝に乗る/等）
様相 D	他者視点の獲得（家庭での役割取得/ 犬への気遣い等）	「静」の交流に応じられる。（*② R. E. A. Dプログラム等）

<\*①玄関でCIを待つポピー><\*②「R. E. A. Dプログラム」>



**R. E. A. Dプログラム**  
Reading Education Assistance Dogsの略。米国発祥。子どもたちが犬に読み聞かせをするプログラム

即興性に富んだ力動が生まれ、CIへの刺激となる。

(4) 考察

三項関係が安定した事例では、CIの行動変容が観察された。安心、安全な空間と時間が継続的に担保された、つまり、「トライアングルのような安全地帯が機能したこと」によって、犬への愛着が生まれ、双方向の関わりの中で得た小さな自信が主体性につながり、安全基地機能が高まったためだと考えられる。Thの役割は二者をつなぎ、結び付け、双方が安心して安全に楽しく過ごす工夫をしながら、CIの話に耳を傾けることであった。たとえばセラピーに取り入れている散歩は、対峙を避け、対話のきっかけとなり、室内で行うR.E.A.D（写真\*②）は自分の話を否定せず聴いてもらえる貴重な体験となった。そして、臆病な犬がCIへの親しみを自ら表現したことも意味深いといえよう。元保護犬であるポピーに自身の傷つき体験を重ね合わせるCIが多く、「回復」や「表現」の見

本となったからだ。Levinson（1962）の言葉「犬は子どもを映す鏡」のように、犬はCIにとって「動く鏡」として存在し、「成長・変容できる見本」として、プラスのエネルギーを賦活させたといえる。

**【倫理的配慮と利益相反】**

CI（と保護者）から書面で承諾を得ている。また動物の負担を考慮し、1日1ケース、2日間連続しない形でセラピーを実施した。本報告に関わる利益相反はない。

**引用文献**

村瀬嘉代子(1997). 子どもと家族への援助—心理療法の実践と展開—. 金剛出版  
Levinson, B.M. (1962). The dog as co-therapist. Mental Hygiene, 46, 59-65.